法人ボランティア（中央ボラ）について

① ボランティア研修を受けます。（令和６年度中央青少年交流の家では、６月８日（土）～９日（日）を予定しています）

② ボランティア登録をします。
登録費用は無料ですが、ボランティア保険に必須で加入していただきますので、保険料（３５０円）が必要となります。

③ 全国の国立青少年教育振興機構が運営する施設でボランティアとして活動することができます。
具体的には、教育事業（子供たちのキャンプ等）のお手伝いです。
これらのボランティア活動には、交通費や食事代等が支払われます。
また、活動後にはボランティア活動証明書を発行することができます。

◎ 法人ボランティアのススメ

- 進学／就職に役立つ
  「ボランティア活動をしていました！」面接で話すことで印象 UP 間違いなし！
- 仲間がたくさん増える
  中央ボラは県内外の高校・大学に所属しています。新しい仲間を増やすチャンス！
- 「人とかかわる」スキルが身につく
  子どもたちを指導する中でのトークスキルや考え方を学ぶことができます。
  ボランティア仲間との何気ない会話で気づきが得られるかも！？

資料
令和５年度ボランティア研修の実施要項
報告書
令和５年度教育事業の報告書（イングリッシュキャンプ）
（すまいるキャンプ）
（防災減災キャンプ）
（親子で遊び隊）

私たちとボランティア
しましょう！

令和５年度 国立中央青少年交流の家 教育事業

ボランティア養成研修会

開催要項

１．目　的　　青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動への意欲を高める。
２．主　催　　独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立中央青少年交流の家
３．期　日　　令和５年６月３日（土）～６月４日（日）　１泊２日
４．会　場　　国立中央青少年交流の家
５．対　象　　ボランティアに興味のある高校生以上
６．募集人数　40 名程度
７．参加費　　3,500 円　（食費・シーツ等洗濯料など）
８．宿泊場所　国立中央青少年交流の家（宿泊棟）
９．企画運営　交流の家職員　及び　法人ボランティア（大学生等）
１０．日　程（天候等の影響により活動内容が変更となる場合がございます）

10:30	10:45	11:00	11:30	12:30	13:30	15:00	15:45	19:00	21:00	22:00	22:30
受付	開会式	アイスブレイクを体験しよう！	昼食	交流の家について知ろう！	ボランティアってなんだろう？	自然で遊んでみよう！	野外炊事をやってみよう！	焚火タイム	入浴	消灯	

6:00	7:00	7:20	9:00	12:00	13:00	14:30	15:30	16:30	16:45
起床	朝のつどい	朝食	清掃	子どもたちを守るための知識を身につけよう！	昼食	青少年の“今”を知ろう！	先輩ボランティアの話を聞いてみよう！	法人ボランティア制度について知ろう	閉会式	解散

① アイスブレイクを体験しよう！
【講師】国立中央青少年交流の家　職員

② 交流の家について知ろう！（青少年教育施設の現状と運営）
【講師】国立中央青少年交流の家　所長　藤原　一成

③ ボランティアってなんだろう？（ボランティア活動の意義）
【講師】国立中央青少年交流の家　職員

④ 自然で遊んでみよう！（ボランティア活動の技術）
【講師】国立中央青少年交流の家　職員

⑤ 野外炊事をやってみよう！（ボランティア活動の技術）
【講師】国立中央青少年交流の家　職員

⑥ 子どもたちを守るための知識を身につけよう！（安全管理）
【講師】大東文化大学　スポーツ・健康学部教授　中村　正雄　氏

⑦ 青少年の“今”を知ろう！（青少年教育）
【講師】國學院大學　人間開発学部子ども支援学科　准教授　青木　康太朗　氏

⑧ 先輩ボランティアの話を聞いてみよう！（青少年教育施設におけるボランティア活動）
【講師】国立中央青少年交流の家　法人ボランティア

⑨ 法人ボランティア制度について知ろう（青少年教育施設におけるボランティア活動）
【講師】国立中央青少年交流の家　ボランティアコーディネーター　柴谷　紗良

１１．申込受付期間　及び　申込方法

【申込期間】

令和５年５月３日（水）～５月 27 日（土）

【申込方法】

右記の QR コードからお申込ください。

１２．持ち物　　事業２週間前までにお知らせいたします。

１３．服　装　　□動きやすい服装　□運動できる靴（サンダル不可）

※当施設は標高約 700mの所に位置しており、平地よりも４～５℃気温が下回ります。
上着を１枚余分にお持ちください。

１４．その他

（１）持ち物など詳細な内容は、事業の２週間前までにメールでご案内いたします。

（２）事業参加中に体調不良となった場合は、ご帰宅いただくことがございますので、予めご了承ください。

（３）天候等の状況により、活動内容が変更となる場合がございますので、ご了承ください。

（４）事業１週間前を経過してからキャンセルされる場合、キャンセル料として食事代を請求することがございます。

１５．申込　及び　問合せ先（ご不明な点については、下記担当までご連絡願います。）

独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立中央青少年交流の家
〒412-0006　静岡県御殿場市中畑 2092-5　　TEL：0550-89-2024　　FAX：0550-89-2025
E-mail：fujinosato-kss@niye.go.jp　　担当：柴谷・高垣

2015 年の国連サミットで、全会一致で採択された 2030 年までの国際目標「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成を目指し、国立中央青少年交流の家は、率先して推進活動に取り組んでいきます。

令和５年度　国立中央青少年交流の家　教育事業

ボランティア養成研修会

令和５年６月３日（土）～６月４日（日）　１泊２日

〇目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

〇参加者（対象及び内訳）

対　象：ボランティア活動に興味のある高校生、大学生、社会人

参加者：計 30 名（内訳：男性 12 名、女性 18 名）

（高校生：10 名、大学生：16 名、社会人：4 名）

〇事業の内容

※悪天候により、プログラムを変更し、一部は事後にオンラインにて実施。

（１）「野外炊事をやってみよう！」

（科目：ボランティア活動の技術）

企画指導専門職　高垣　信宏

当施設の野外炊事に関するルールだけでなく、指導者としての意識付けとなるような観点で注意事項を伝え、グループで協力しながらカレー作りに取り組んだ。

（２）「自然で遊んでみよう！」

（科目：ボランティア活動の技術）

事業推進係長兼企画指導専門職　髙瀬　宏樹

当施設の自然物を使った３種類のアクティビティを体験した。参加者同士が楽しむ様子が見られ、今後のボランティア活動で実践してみたいという声が聞かれた。

（３）「子供たちの安全を守る知識を身につけよう！」

（科目：安全管理）

大東文化大学　スポーツ・健康学部　　教授　中村　正雄　氏

子供たちとの活動中に起こりうるリスクや安全とのバランスを学んだ後、AED を使用した心肺蘇生法を少人数のグループに分かれて演習を行った。

（４）「青少年の“今”を知ろう！」

（科目：青少年教育）

國學院大學　人間開発学部　准教授　青木　康太朗　氏

青少年を取り巻く社会や子供の体験活動の現状を学んだ。それを踏まえ、今後、青少年の成長を支える環境づくりのためにボランティアとしてできることについて考えた。

（５）「交流の家のボランティアについて知ろう」

（科目：青少年教育施設におけるボランティア活動）

当施設法人ボランティア６名

当施設で活躍する先輩ボランティア６名がボランティア活動の魅力や始めたきっかけなどについて話した後、各先輩ボランティアと自由に話ができるような場を設定した。参加者の不安や疑問を払拭し、今後の活動への意欲を引き出す時間となった。

（６）「交流の家について知ろう！」

（科目：青少年教育施設の現状と課題）

国立中央青少年交流の家所長　藤原　一成

これまでの日本の歴史における社会教育および青少年教育の意義について確認し、その中で国立中央青少年交流の家の成り立ちや存在意義について学んだ。

（７）「ボランティアってなんだろう？」　※オンラインにて実施

（科目：ボランティア活動の意義）

ボランティア・コーディネーター　柴谷　紗良

社会教育現場におけるボランティア活動の意義や心構え、留意点について参加者同士の意見交換や職員の経験談等を交えながら学び考える場となった。

（８）「法人ボランティア制度について知ろう」※オンラインにて実施

（科目：青少年教育施設におけるボランティア活動）

ボランティア・コーディネーター　柴谷　紗良

法人ボランティア制度や法人ボランティアポータルサイトの説明をし、登録作業を行った。また、法人ボランティアとして活動する際の注意事項や事務手続きについて確認をした。

《参加者の感想》

・自然の中での体験の大切さやそれを安全に行うために注意すべきことなど、今回学んだことを今後のボランティア活動の場で試し、経験を積んでいきたいと思った。
・大学生や社会人など、普段関わる機会のない人とプログラムに取り組んだりコミュニケーションをとったりして、刺激的で新鮮だった。
・自身のスキルアップやボランティアについて知識を深めることができて良かった。

《成果と課題》

〇高校生、大学生、社会人等普段関わり合うことのない年代が混在するような班編成を行ったことで、参加者同士の交流が良い刺激となり、今後の活動に対する意欲につながる様子がうかがえた。
〇記録的な大雨のため、やむを得ず大幅な日程変更を行ったが、運営のサポートスタッフとして参加したボランティアや参加者を含め、全員が臨機応変に対応したことで円滑に事業を運営することができた。
●多くの登録ボランティアに活動機会を提供できるよう、教育事業以外でもボランティアの活動の場を設定するなど工夫する必要がある。

令和５年度　国立中央青少年交流の家　教育事業

富士のさと　イングリッシュキャンプ

令和５年９月 16 日（土）～９月 18 日（月・祝）２泊３日

〇目的

米軍海兵隊との交流や、英語での体験活動を通して、多くの人と英語でのコミュニケーションをとっていく。その中で英語の難しさ、自国文化（言語）との違い、英語を伝える・聞き取ることができたときの喜びを体験的に感じることで、英語を使うことへの興味・関心を高めていくことを目的とする。

〇参加者

小学５・６年生　34 名（男子：15 名、女子：19 名）

〇本事業の特徴

・在日米軍海兵隊キャンプ富士諸職種共同訓練センター（以下、「キャンプ富士」という）と連携し、３日間を通して海兵隊員とともに活動する。

・全体を通してのグループ分けではなく、活動に応じてグループを作ることで、より多くの参加者同士の関係性を構築させる。

〇事業の内容

・１日目

（１）アイスブレイク（交流ゲーム）

英語を使ったゲームを通して緊張をほぐし、お互いのことを知ることができた。また、海兵隊員が考案したゲームを行い、交流することができた。

（２）イングリッシュウォークラリー

海兵隊員が英語で指示を出し、参加者はそれを聞き取ってコースを進んでいく形式のウォークラリーを行い、英語を使うためのウォーミングアップの機会になった。

（３）交流タイム①（ビーチコートプログラム）

ビーチコート内で海兵隊員や参加者同士が自由に身体を動かし、交流を深めた。

（４）野外炊事（BBQ、焼きそば）

グループで協力して夕食を作るとともに、翌日のダッチオーブンでの調理に向けて、野外炊事の流れや動きを確認する機会になった。

・２日目

（１）キャンプ富士訪問

憲兵隊や消防署にはどのような設備があり、どのような仕事をしているのかを見学した。また、レストランや売店にて英語で買い物を行い、異文化体験を行うことができた。

イングリッシュウォークラリー

交流タイム①

キャンプ富士訪問（消防署）

（２）野外炊事（ダッチオーブンを使ったローストポーク、ミートソーススパゲティづくり）
特殊な調理工程のあるダッチオーブンを使用し、グループで協力して夕食づくりを行った。

（３）キャンプファイヤー
フォークダンスやレクリエーションを行い、交流を深めた。サイコロトークを実施し、キャンプの思い出や海兵隊員のことについて語り合う時間となった。

・３日目

（１）交流タイム②（発表原稿づくり）
３日間の思い出や頑張ったことを発表するために、海兵隊員と一緒に英語の文章作りを行った。その中で、わからない単語を確認することや、発音の仕方を教えてもらう姿が見られた。

（２）メモリータイム
自分で考えた文章を、ペアを交代しながら繰り返し個別に発表し合い、英語で話すことへの自信をつけた。その後、一人一人が全体の前で堂々と英語で発表することができた。

野外炊事

キャンプファイヤー

メモリータイム

○参加者の声（事後アンケートより）

・最初は英語がわからなかったが、楽しく学ぶことができた。
・友達がいっぱいできて、海兵隊員の皆さん達とも楽しくお話しできた。
・ゲームや食事作り、キャンプ富士見学など色々な活動を体験でき、とても楽しく勉強になった。

○アンケート結果の考察

事前と事後のアンケートから、「外国人と交流をしてみたい」「外国に行ってみたい」の項目で向上が見られた。海兵隊員とのコミュニケーションにおけるネイティブな英語を体験したことや参加者同士で英語による交流を図る中で、「できた」「できなかった」ことを多く体験したことが、自分たちと違う文化や言語への興味・関心を育んだと考えられる。

○成果・課題

○本事業は全体を通しての班編成を行わずに実施した。参加者の声として、「全く知らない人たちと交流ができた」「同年代の友だちがたくさんできた」とあることから、固定化された集団ではなく、広くコミュニティを形成していたことがうかがえる。参加者同士で信頼関係を形成することができたため、いろいろな人との英語での会話に挑戦する様子が多く見られた。

○前年度の反省点を踏まえ、SNS・ホームページでの広報に加えて、地元の新聞に記事掲載を行った。ネット媒体は県外の参加者からの応募に効果があり、地元の新聞への記事掲載は近隣の参加者からの応募に効果があった。その結果、静岡県内外の様々な地域から定員を上回る参加者を募ることができた。

●組織キャンプとは違った特殊な運営をしていく中で、担当スタッフ・ボランティア間で事業目的や到達目標などのビジョン共有はできていたが、スタッフの細かな配置やプログラムごとの動きなど、臨機応変に動くケースが多かった。班編成を行わない取り組み自体は、事前に想定した通りの効果を得ることができたため、今後は担当スタッフ・ボランティアの配置や動きを含めて安定した事業運営ができるよう検討していきたい。

令和５年度　国立中央青少年交流の家　教育事業
大学生のためのボランティア活動推進事業　自主企画事業支援プロジェクト

すまいるキャンプ

令和５年 11 月 25 日（土）・26 日（日）１泊２日

〇目的

□自主企画事業のねらい

法人ボランティアが学びと活動の循環をしながら成長していくための一助となることを目的とする。

□企画ボランティアが企画した事業のねらい

多くの小学校では５年生から宿泊行事を実施するため、宿泊を経験していない２～４年生を対象とした。また特性を持った子供を対象とした宿泊事業は限られており、そのような子供たちにも気軽にキャンプの体験をして欲しいという思いから、支援学級や支援学校に通学している子供も積極的に受け入れることとした。このような対象にすることで、さまざまな参加者が想定されるため、キャンプという日常とは異なる活動を通して、他者との繋がりや気持ちを共有するという経験をし、「協力」することの大切さを学ぶきっかけづくりを本キャンプのねらいとした。

〇ねらい達成のための取組

キャンプのテーマを「絵本」とし、企画ボランティアがオリジナルで作成した絵本のストーリー（主人公のハリネズミ「サン」が各活動を仲間と協力して行うとパズルのピースが手に入りパズルを完成させていく）に沿って活動を行った。またその内容も低学年、そして特性のある児童もいるため、適度な難易度かつ協力することを大切にするものとした。

〇参加者

□法人ボランティア

企画・運営　:4名（女性4名　内訳:大学3年生3名　大学1年生1名（当日欠））
当日サポート:8名（男性2名　女性6名　内訳:社会人3名　大学4年生1名　大学3年生1名
大学2年生1名　大学1年生2名）

□参加者（対象:小学2～4年生　支援学校や支援学級に通う児童も参加可）

小学生 31 名（男子 13 名　女子 18 名　内訳：４年生 11 名　３年生 11 名　２年生９名）

〇本事業の仕組み

当施設で活動している法人ボランティア４名が企画ボランティアとなり、事業のねらいを設定し、そのねらいを達成するためのプログラム、２日間の事業の流れを話し合い決定した。

〇当日までの流れ

５月下旬　企画ボランティア決定
７月上旬　企画ボランティアと担当職員の顔合わせ（オンラインミーティング）
以後随時　企画ボランティアと担当職員の進捗状況確認
８月下旬　機構本部、自主企画事業支援プロジェクトへ申請・採択
９月下旬　事業企画書作成及び開催要項・チラシを作成
10 月８日　事前研修（ボランティア 11 名）　企画ボランティアによる次長へのレクチャー
10 月中旬　チラシ発注・広報開始
10 月 25・29 日　事前相談説明会（25 日対面　29 日オンライン　参加者５組６名）
11 月上旬　参加者決定

11 月上旬　二次案内及び落選者への「お手紙」の送付
11 月中旬　事前準備
11 月 22 日　企画ボランティアによる所長へのレクチャー
事業前日　集合・最終準備
※上記以外にも企画メンバー４名で打ち合わせを行いながら準備を進めた。

〇事業当日の運営及び日程

企画ボランティアの他に、参加者のサポート役のボランティアも運営に携わった。応募者数が非常に多く、当初の予定より参加者を増やして事業を行ったため、サポートが手薄になることも懸念されたが、経験豊富なボランティアも多く、円滑に事業が遂行することができた。

11月25日(土)

9:45	10:00	10:20	12:00	14:00	17:00	18:15	20:00	21:30
受付開始	はじまりの会	アイスブレイク	クッキング	旗作り	夕食	ナイトプログラム	入浴	就寝

11月26日(日)

6:30	7:00	7:20	9:20	12:00	12:40	13:45
起床	朝のつどい	朝食	森の運動会	ランチタイム	お話タイム	おわりの会

〇当日の様子（参加者）

アイスブレイク

クッキング
（ホットケーキ）

旗作り

ナイトプログラム
（影絵）

運動会

ありがとうタイム

〇ボランティアの活動及び成果物

□事前研修

職員による講義①

職員による講義②

企画練習①　ナイトプログラム

企画練習②　クッキング

企画練習③　旗染め

企画練習④　デカパン作成

企画練習⑤　アイスブレイク

事前相談説明会

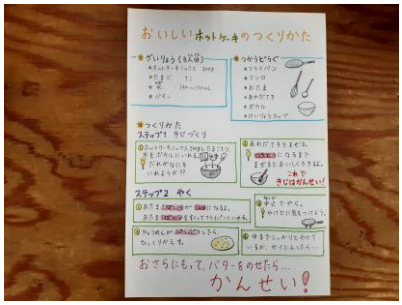
□成果物及び準備物

ルール説明

しおり

絵本の主人公　「サン」（左）

パズル



クッキングレシピ

ナイトプラグラム

安全に関する掲示①

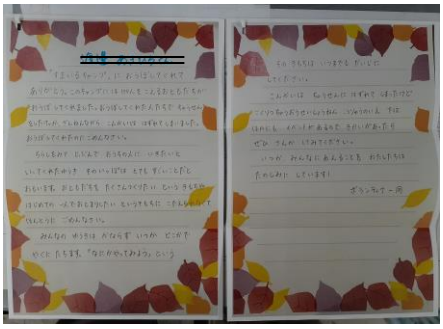
安全に関する掲示②

運動会プログラム

ボランティア紹介

運動会メダル

閉会式　動画上映



落選者への「お手紙」

〇事業を終えて

《企画ボランティアの感想》

- 新たな挑戦や予想外の出来事もあり様々な葛藤がありましたが、参加者にとってより楽しいもの、ワクワクすることは何かを考え、満足のいくキャンプが出来るように試行錯誤を重ね、無事に開催することができて良かったです。
- 保護者の信頼を得ることが事業において重要であり、成功に繋がることを実感しました。
- 企画をする過程や子どもたちと関わる中で、私たち自身が大切なことを学べたと感じました。
- 多くのボランティアの協力があり実施することができたので、感謝しかありません。

《成果と課題》

〇成果

・これまでにないターゲット（小学２～４年生　支援学級や支援学校の児童も可能）を対象として計画したため、非常に多くの応募者数があった。定員を大きく上回る応募があり、家庭や子供のニーズを知ることができ、今後の教育事業への参考となった。

・参加ボランティアの構成がベテラン・中堅・若手とバランスが良く、事前研修、当日の活動及びミーティングにおけるコミュニケーションも密に行われたことで、次世代のボランティアに繋がる事業となった。

〇課題

・企画ボランティアに非常に多くの負担（企画・事前準備・当日運営等）をかけることとなったが、参加者及び保護者の満足度は非常に高かった。しかし、今年度の事業が基準になると、来年度以降の企画ボランティアへのプレッシャーとなりかねない。引き継ぐべき内容を見極めながら、来年度以降の事業に活かしていきたい。

・ボランティアが事業の企画・運営に必要な知識やスキルを段階的かつ継続的に身につけていけるよう、研修や経験の機会の場を提供し、サポートしていく必要がある。

令和５年度　国立中央青少年交流の家　教育事業

富士のさと 防災・減災キャンプ　事業報告書

令和６年１月 13 日（土）～１月 14 日（日）　１泊２日

１．目　　的

広域防災拠点として、自助・共助・公助の３面から横断的に防災・減災について体験し考える機会を提供する。そして、参加者自身が周囲のコミュニティ（学校のクラスや家庭）における防災減災の推進者として、災害の恐ろしさや日常的な備えの大切さ、助け合うことの重要性を考えるきっかけを作ることができる人材となることを目指す。

２．対　　象

小学４～６年生　32 名（男子：19 名、女子：13 名）

３．協　　力

陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地・板妻駐屯地、能美防災株式会社

４．日　　程

令和6年 1月13日(土)

10:00	10:30	10:50	11:30	12:30	15:30	17:30	19:30	21:30
受付	はじめの会	アイスブレイク	昼食	**防災について考えよう！** 自衛隊講話 シチュエーションゲーム	**防災クッキング**	**テント張り**	**停電時の生活を体験しよう**	就寝

1月14日(日)

6:00	7:00	9:00	11:30	12:20	14:00
つどい 片付け	**非常食体験** 片付け	**防災ラリー**	昼食	**防災リーダー行動宣言** おわりの会	

５．事業内容

【事業１日目】１月 13 日（土）

（１）自衛隊講話、シチュエーションゲーム

陸上自衛隊板妻駐屯地の災害派遣を経験した隊員より、静岡県熱海市伊豆山での行方不明者捜索や土砂撤去の体験などを講話いただいた。その後、陸上自衛隊滝ケ原駐屯地の隊員にご協力いただき、毛布や物干し竿、ロープを用いた担架作りや、ごみ袋や新聞紙、定規を用いた骨折の応急処置方法、土のう作りの方法を参加者同士で相談し試行した後、自衛隊員から実際の方法や作成上のポイントについて説明を受けた。

（２）防災クッキング

包丁や皿の洗浄が不要なポリ袋を用いて、和風パスタとわかめの酢の物を調理した。必要な材料は、いずれも長期保存が可能で備蓄しやすい食品を選定した。

（３）テント設営

避難所を想定したプライベートスペース確保のため、テントの設営を参加者自身で行った。

（４）停電時の生活体験

被災してライフラインが制限された状況を想定した活動を行った。ランタンの明かりを頼りにテントの中でお風呂の代わりに清拭シートで体を拭き、その後すすぎが不要な液体歯磨きで歯を磨いた。

シチュエーションゲーム（応急処置の場面）

防災クッキング

テント設営、停電時の生活体験

【事業２日目】１月 14 日（日）

（１）**朝のつどい、非常食体験（朝食）**

非常食体験として長期保存が可能なレトルトカレーを食べた。またデザートには、能美防災株式会社からご提供いただいた長期保存可能なアレルゲンフリーのクッキーを試食した。

（２）**防災ラリー**

１日目に体験した担架作りや土のう作りを含む、全６個の防災に関するチェックポイントを班で回る防災ラリーを実施した。

（３）**防災リーダー行動宣言**

２日間の振り返りを行い、それを基に参加者自身が今後防災において意識したいことや行動していきたいことを宣言した。参加者の行動宣言は、「災害時に慌てず避難する」ことや、「災害備蓄品を今のうちに確認しておく」など、２日間の体験を通して自身がより大切にしたいことを文字や言葉にした。

非常食体験

防災ラリー（消火器で消火体験）

防災リーダー行動宣言

６． 企画運営のポイント

- 事業目的である「自助・共助・公助の理解」ができるよう、１つ１つのプログラムが自助・共助・公助のいずれかと関連性があるように企画した。
- 陸上自衛隊滝ケ原駐屯地・板妻駐屯地に協力を依頼し、公的機関における災害救助（＝公助）についてプロの声を参加者に届けられるようにした。また、応急処置や担架作り、土のう作りの方法を自衛隊員から直接教わることで普段接する機会がない自衛隊員との交流や、参加者のより深い理解に繋がるようにした。
- 事業開始前から参加者が災害備蓄品について考える時間を作れるように、１日目夜の振り返り時間で食べるお菓子は日持ちするものであるよう指定し、家族でどのようなものがあるかを相談する機会を設けた。

７． 参加者の声（事後アンケートより抜粋）

- 自衛隊さんの話もすごく分かりやすかったし、普段あまり地震のことを考えないから、とても勉強になった。もし本当に地震が来てしまったらこのキャンプで学んだことを活かしたいです。
- 停電した時のライトの大切さ、普段の食事のおいしさを感じました。食べ慣れたものを食べられるようにローリングストックをしていきたいです。
- 「ほっとひと息つけるもの」を用意していきました。友だちとお菓子の交換できたのが、楽しかったです。これからも困ったときにはお菓子を分けてあげたりしたいです。

８． 成果と課題

（１）アンケート結果　回収 26 名（参加者 32 名・回収率 81%）

事業全体の満足度			
満足 25 名（96%）	やや満足 １名（４%）	やや不満 ０名（０%）	不満 ０名（０%）

（２）成果と課題

○ シチュエーションゲームでは最初から自衛隊員に教わるのではなく、参加者同士で 10 分間話し合い、試行する時間を設けた。それにより、これまでの経験を生かした発想や新たなアイデアが見られ、参加者の創造力を育むことができた。災害時における自助の面では、自分の身を守るために臨機応変な対応も必要であるため、自分で考える時間を設けることは防災・減災の観点からも有効だと考えられる。

○ 事業全体で災害時を想定し、ライフラインや食料、道具などに制限をすることで、参加者同士で思いやる気持ちや、お互いに助け合う姿が見られた。

○ 防災ラリーは元々活動プログラムとして利用者に提供しているが、活動時間の長さや、活動場所の分散などによる理由から、利用実績が他の活動プログラムよりも少ないという現状がある。そこで今回は、防災ラリーのチェックポイントを新たに４つ考案し実施した。また、活動場所を従来のものから狭くすることで、準備や安全管理がしやすくなった。今後は、実践で得た感想やフィードバックを基にブラッシュアップすることで、より多くの利用者に選ばれる活動プログラムを目指したい。

● 参加者の安全と災害時の厳しさの両方を考慮しつつ、どこまで災害時の状況を想定した活動を提供するか非常に葛藤があった。今回は活動プログラムによって水や電気を一部制限せず実施をしたが、災害時を意識させるキャンプを目指すために、細かな状況設定（例：班で使用できる水をタンク１つにし、蛇口は使用しないなど）が必要だと感じた。

令和５年度　国立中央青少年交流の家　教育事業
「生活・自立支援キャンプ」

富士のさと 親子で遊び隊

令和６年１月２７日（土）～１月２８日（日）　１泊２日

１.目的

ひとり親家庭の子供たちが、普段体験できない活動にチャレンジするとともに、集団宿泊生活を通して、規則正しい生活習慣や成功・失敗体験から学ぶことの大切さを感じる機会とする。また、ひとり親の悩みを同じ境遇の親同士で共有することで、子育てへの前向きな気持ちを高め、子供との交流を通して親子の絆を深める。

２.参加者

ひとり親家庭の子供とその保護者
15 家族　38 名

３.会場

国立中央青少年交流の家
湖明荘マリーナ（山梨県南都留郡山中湖村山中 236-13）
郷土料理「海馬（シーホース）」（山梨県南都留郡山中湖村山中 86）

４.事業内容

【事業１日目】１月２７日（土）

（１）はじまりの会（アイスブレイク）

「手遊び歌」をはじめ、家族紹介を目的とした「何でもバスケット」などの活動を通して、緊張をほぐし、それぞれの家族のことを知りながら楽しむ内容であった。

アイスブレイク

（２）マイスプーン・フォークづくり

材料選びから自分で選び、文字や絵を描き、各自がこだわりを持って、世界に一つだけのスプーン、フォークを制作した。親も子供も楽しみながら、真剣に取り組んだ。ここで作製したスプーンを夕食のカレーライスを食べるときに使い、笑顔で食べる姿が見られた。

マイスプーン・フォークづくり

（３）野外炊事

ご飯を通常の野外炊事で使う片手鍋ではなく、羽釜を使って炊いた。昔ながらの羽釜を使うことで、昔の懐かしさや羽釜で炊くご飯のおいしさを感じてもらい、普段できない体験になった。

子供たちは野菜を切る、薪を組んで火を起こすなどを初めて体験した。

野外炊事（カレーづくり）

（４）ブレイクタイム（親）、自由遊び（子供）

親と子供に分かれて活動した。子供は体育館で体を動かした。親は、座談会形式で普段の生活や子育ての不安や悩みを共有し、お互いを励まし合うなど交流を深めた。

【事業２日目】１月２８日（日）

（１）ワカサギ釣り（山中湖　湖明荘マリーナにて）

ドーム船に乗り、ワカサギ釣りを体験した。初めて釣りをする家族が多かった。各家族ともたくさんのワカサギを釣ることができた。ワカサギ釣りが今回参加する動機づけになった方がいたので、体験できて良かった。

ワカサギ釣り

（２）昼食　ほうとう（郷土料理「海馬」シーホースにて）

山梨県の郷土料理であるほうとうを食べた。自分たちが釣ったワカサギを店で天ぷらにしてもらって食べ、これも思い出の一つになった。

５.参加者の声（事後アンケートより）

・一緒に思い出を作れて良かった。普段は、怖がりな子が、自分で穴を開けてみたいと頑張っている姿に感動した。家で嬉しそうにフォークやスプーンを使っていて、微笑ましかった。【マイスプーン・フォークづくり】

・ご飯が絶妙な炊き加減で感動した。薪をくべて、火を起こすところから体験できて、息子は大喜びだった。子供も普段とは違うお手伝いや、役割に挑戦できて良かった。【野外炊事】

・いろいろな方の話、経験談が聞けてすごく参考になった。【ブレイクタイム】

・普段関わっている友達（保護者同士）には話せないような話ができたので、すごくストレス発散になった。【ブレイクタイム】

・普段、体験できないことに取り組めて良かった。子供がワカサギを釣って感動していた。自力で行くのは不可能だと思っていたので、体験できて良かった。【ワカサギ釣り】

６.成果と課題

（１）アンケート結果　回収 15 家族（参加 15 家族・回収率 100%）

事業全体の満足度			
満足 15 家族（100%）	やや満足 ０名（０%）	やや不満 ０名（０%）	不満 ０名（０%）

（２）成果と課題

今回の目的とアンケートを照らし合わせ、

〇普段できない活動にチャレンジする⇒【親】「野外でのカレー作り」、「ワカサギ釣り」等の体験内容に対するチャレンジや「子供を叱らない」、「なるべく子供に手を貸さず、自主的にやるように見守る」等子供との接し方に関するチャレンジが多数あった。【子】「野菜を食べた。」「初めて包丁で野菜を切った。」「『ありがとう』」を言った」、「友達をたくさん作った」、「薪を燃やした」等のチャレンジがあった。

〇集団宿泊生活を通して、規則正しい生活習慣から学ぶ（普段の生活に生かせそうなこと）⇒【子】「手伝いをしてみたい。」「時間をしっかりと守る。」「あいさつをする」等の学びがあったようだ。

〇成功・失敗体験から学ぶ⇒【親】「子供たちが自分のことは自分でやり、率先して考えて行動できたかなと見て感じ嬉しかった」等、普段よりゆとりを持てたことで子供の成長、良さを見付けた方が多かった。

〇ひとり親の悩みを同じ境遇の親同士で共有することで、
子育ての前向きな気持ちを高める⇒「普段は話せない事を相談でき、ひとり親でも色々な事情のある方がいて、皆さん頑張っていると思うと、私も頑張れると思った。」

〇子供との交流を通して親子の絆を深める⇒参加者全員が深めることができたと回答。

以上のことから、目的に対しての成果があったと考える。

●参加者が慌てることなく、スムーズに進めることができた日程であった。しかし、予定していた時間よりも遅くなったり早くなったりすることがあった。そのときの対応を職員、ボランティア、参加者で共通理解し、臨機応変に対応する必要がある。

●事前の安全対策を徹底的に行う等を行う必要がある。事前に対策できることはすること、何か起こってしまったらそのときの対応をきちんとすること等を事前にスタッフで共有しておく。